



写真1 | ジョンソンタウンは、入間市駅から徒歩18分。当時の米軍のゲートの前に位置する

## 第3話 米軍ハウスと創造的なコミュニティが織りなす景観 「ジョンソンタウン」

渡辺 治 | 渡辺治建築都市設計事務所

### 1 「磯野スラム」からのスタート

ジョンソンタウンは、埼玉県入間市(人口約15万人)、西武池袋線の入間市駅から徒歩約18分に位置する。1933年磯野商会は製糸会社から約20万坪の土地を取得する。地区の南側は富士見公園に接しており、公園は農地解放時に接収された土地であった(接収されて現在の約8000坪になった。写真1)。1945年、戦後GHQがそれまでの陸軍航空士官学校を接收しジョンソン基地とし、1950年朝鮮戦争勃発時、基地増強のために民間に米軍ハウスをつくることを求めた。そのときに磯野商会は米軍のためのハウスを24戸建設する。1978(昭和53)年、基地が自衛隊入間基地へ返還され、日本人向けに賃貸されたが、徐々に荒廃し、スラム化が進んだ。1996(平成8)年、現在の磯野達雄社長が兄からこの地区の管理を引き受けたときには、居住者は高齢化、家屋は老朽化し、地区はスラム化していた。それに心を痛めた磯野達雄社長から、2002年、アメリカ留学の経験がある著者に協力の依頼があった。「米軍ハウス」という文化遺産を改修、保全し文化的で魅力的な町並みを形成し、元の自由で創造的で、家族を大切にする気風を持つコミュニティをつくりたい、という方向は両者(磯野と著者)で共通していた。その後、10年以上の時間をかけて二人三脚でまちの再生に取り組む。



### 2 米軍ハウス

ジョンソンタウンには、79棟の内、第二次大戦後に建設された米軍ハウスは24棟が現存している。ジョンソンタウンの名は、入間基地がジョンソン基地と呼ばれることから居住者たちがそう呼ぶようになった。

米軍ハウスは、GHQが自ら基地内に建てたものと、高額賃を支払うことを前提に民間誘導型で建てさせたものがあり、ジョンソンタウンは後者であった。GHQは住宅や各種の建物を日本で建てるために、日本人のチームからなるデザインプランチをつくる。彼らの当時の設計資料は「DEPENDENTS

HOUSING」にまとめられたが、その中で、クルーゼ(Heeren S. Kruse)少佐は、米軍ハウスのことを、「住宅復興策(Rehousing Program)」と述べていた。また、「この規格の建築はアメリカ式の住宅ではない。(中略)同時に、日本人にとっては新住居・新生活様式の先駆とみなされ得るものである」とも述べており、日本の復興を急速に進めさせると同時に、その後の産業や経済復興に寄与させることを意図していたことは特筆にあたいするだろう。

### 3 ジョンソンタウンの米軍住宅

ジョンソンタウンの住宅は吉沢建設の創設者であった故吉沢誠次が個人で設計施工を請け負った(図2)。生前の吉沢氏は、入間基地内に建設されていた、米軍ハウス(基地内に日本政府が建てたハウス)を見よう見まねでつくったと語っていた。

また、当時、進駐軍に借り上げてもらうには、水洗トイレ、集中暖房、給排水整備、部屋数などGHQが示す基準があり、それらをどれだけ満たしているかによって、賃貸料が決められた。

ジョンソンタウンの当初の建築の特徴は以下のようである。

■基礎:I型の番線コンクリート基礎で床レベルを地盤に近づけている

■構造:木造在来工法+トラス構造で4間のスパンを持たせている(今で言うスケルトンインフィルの考え方とされている)。現代の在来工法でも4間は飛ばさない

■平面:3畳のトイレ風呂、10畳のキッチンダイニング、10畳のリビング、2ベッドルーム、ウォークインクローゼット(このタイプのクローゼットがあるのは米軍ハウスの中でも希有な例)

■外装:屋根はコンクリート瓦、外壁は木の下見板に塗装、窓は木サッシの引き戸タイプ

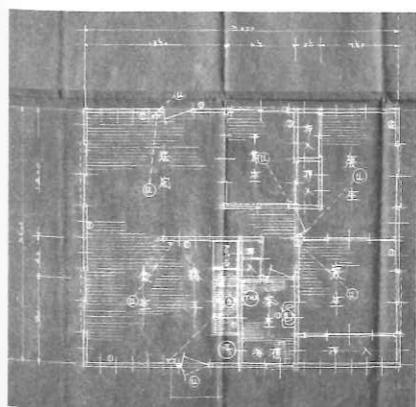
■内装:3×6版のペニア仕上げ、床は木フローリング、キッチンは木製のつくり付け

■排水:浄化槽(水洗トイレのために研究開発された)

■暖房:石油ストーブが輸入され、タンクは基地から戦闘機のタンクを譲り受けで設置した。

■便器:水洗便器を輸入し、設置。

■建築配置:入り口は妻入りで、方位と無関係に、入り口と居間が街路の方に向き、まち並みを構成している。ジョンソンタウンの南には広い公園があるが、居間と入り口をそちらの方を向けている家はなかった。



上記の仕様は、当時の日本の仕様とはかけ離れており、GHQの指定する基準を満たすものだった。電化製品、瞬間湯

図2 | 故吉沢誠次氏の描いた図面



写真2 | ジョンソンタウンのまち並み。左列が平成ハウス、右列が米軍ハウス

沸かし器、水洗トイレなどを装備した住宅は、上下水道が整備されていない当時の日本人にはまるで宇宙船のように見えたに違いない。日本の独立後は、大部分のアメリカの兵隊は日本から離れ、空き家になった進駐軍ハウスには、独立し自由な表現を許された日本の文化人が住むようになった。細野晴臣(ほそのはるおみ)は埼玉県狭山市の進駐軍ハウスに、村上龍は福生市の進駐軍ハウスに住んでいたことは有名である。

しかし、40年も経つとジョンソンタウンは高齢化、老朽化が進み、私たちがかわる頃には、「磯野スラム」と呼ばれるようになり、2004年の時点での家賃は1軒で2万前後であった。

### 4 生まれかわるまち並みとコミュニティ

この地区を再生するにあたって「将来の標準になる住宅」、「進駐軍(GHQ)の意思を受け継ぐ」ということを強く意識し、家族と暮らしながら理想的な職場にもなる福祉のまちづくり+いえづくり=「安心安全タウン」の形成を目標とした。そして10年以上にわたり老朽化した進駐軍ハウスの改修、保全、日本家屋を進駐軍ハウスのDNAを継承する現代の進駐軍ハウスとして「平成ハウス」を設計・建築し、建物の再配置や回遊性のある街路の新設、街路のバリアフリー化、広場の新設、看板や色のデザインコードの指針の作成、使用規定の作成、インフラ(上下水道、街路や広場の整備、電柱の移設、雨水浸透、セキュリティ)の整備、植樹の整備、レストランの誘致、地域イベントの運営、コミュニティへの活動支援(ワンデーマーケットやイベント)などを行ってきた。

そうして、老朽化、スラム化していた家々のうち、戦後建てられた24棟の進駐軍ハウスは全て改修され保全され、平成ハウス36棟が日本家屋に取って代わり、アメリカ風の特殊なまち並みを形成するに至った(図1、写真2)。そのほかに敷地の中には、日本家屋(将校の家)4棟、アパート6棟(セキスイハイムM1: DOCOMOMOに指定されている)も残され有効利用されている。

一方で高齢化して子どもが一人も住んでいなかったコミュニティは、若返り、子どもが増えると同時に、障害者、高齢者、外

❖1 磯野商会はキリンビルの創設者として歴史に名前が出てくる

❖2 磯野達雄:1962年東京大学文学部心理学科卒業、1996年東芝退社、現在、株式会社磯野商会代表取締役、公益財団法人磯野育英奨学会理事長

❖3 Independent House: GHQの呼び名。進駐軍住宅、占領軍住宅とも翻訳される。現在は米軍ハウスや「ハウス」という俗称、愛称で呼ばれている



写真3|60年前に建設された米軍ハウス



写真4|元米軍兵の夫妻が住んでいた棟

国人、文化人が交流しながら家族と楽しく住み、文化活動を行なう活気あふれるまちになり、130世帯、約210人が住もうようになった。

まちでは数多くの映画撮影、音楽製作、出版などが行われる。多くのメディアでも紹介され、魅力ある店や景観を観に多くの人が訪れるようになった。現在、入間市では観光地、文化遺産として当地区を位置づけようとしている。

数年前、50年前に住んでいたもと米軍人の夫婦が旅行中に突然、タウンに立ち寄ってくれ、自分が当時住んでいたハウスで記念写真を撮って帰つてから、その次の年も現れた。その代わり、磯野商会の社長もアメリカの住宅地を視察がてら夫妻の自宅を訪れたこともあった。

## 5 | 米軍ハウスの再生 これからの30年のために

残っていた、60年前に建設された米軍ハウスは、土台や柱が不足しており、基礎は細い番線が入っているI型の粗末なものだった(写真3)。ジョンソンタウン以外の地域で残っている木造の米軍ハウスも同様な状態で、改修を諦めて取り壊された例がほんと多かったが、ジョンソンタウンの米軍ハウスの建物は平屋だったので、容易にジャッキアップでき、基礎をつくり替え、土台や腐食してなくなっていた柱を取り替えまたは継ぎ足し、床下や壁、屋根下に充分な断熱材を入れ、構造用合板で構造補強し、サッシを取り替え、現代の高気密高断熱の住宅と同等の性能にして改修・保全を行なった(写真4)。

改修の仕方はさまざまであるが、扉は当時のものを改修し、床材は特にオリジナルのまま改修した例が多く、増築された下屋は撤去され、原型に戻された棟もいくつかある。平面プランもいくつかは使いやすいように変更された。

ジョンソンタウンの貸家は内装や庭は居住者の意思で変更してもよく、玄関がないプランは容易にお店として機能した。

## 6 | 「平成ハウス」これからの標準住宅づくり

新築や改修は地元の大工や、高齢化した大工を雇い入れて行われた。とりわけ、平成ハウス1号、2号は、60年前にジョンソンタウンの設計と建設を行なって、今は入間市で最も大きな工務店となった吉沢建設が建設にあたった。建設にあたり、当時の設計施工を行なった吉沢建設の会長が存命で、当時どのように設計し、どのような工法でつくったかの証言を得られたのが「平成ハウス」(写真5)の設計に役立った。

もし、GHQが現代に進駐軍住宅(復興住宅)を日本で考えるとしたらどのような価値観でつくるかが論議された。つまり、これからの日本の住宅はどうあるべきかが論点とされた。

新たな標準住宅として、住み続けられるまち:高齢者や障害者にやさしいバリアフリーの「安心安全タウン」、介護しやすい住宅(図3)、環境負荷が少なく、生活環境重視の家づくり:床暖房、2×4材を使った屋根、内装にはペニアが発展してきたOSB(Oriented Strand Board:間伐材などでつくれる環境を壊さない構造用合板)が使われた。

これらの考え方は、ホームページ上で公開され、これに共感したとして、最初に居住者として名乗りをあげたのは、映画監督であり音楽家でもある若者だった。若者は、音楽関係者の仲間に呼びかけ、ジョンソンタウン内にプロ用の録音スタジオを誘致し、何人かの仲間も居住者として招いた。

とりわけ、床材をやめ、床暖房を組み込んだコンクリートむき出しの床とするにはずいぶんと論議があった。結果的に、玄関がない入り口とコンクリートの床は、大きな犬を飼い、お店にするのに好都合となった。

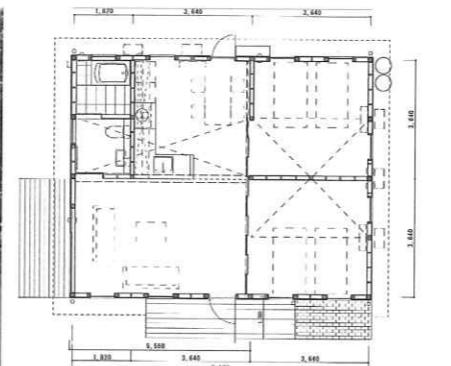


図3|介護しやすく、フレキシブルなプラン

このまちでは夏涼しく冬は暖かく、汎用性がありバリアフリー。これらがこれからの標準住宅には不可欠な要素とされたのである。

## 7 | 出会いがあるまちなみ景観をつくる

また、建物以上に手間と時間がかけられているのが外構の植栽である。地区に回遊性を持たせるために歩行者専用の街路が新たに設けられ、そこにテラスを開き、出会い、挨拶、会話となる。居住者同士の活動に発展し、景観に活気を与えている。人の活発な活動はジョンソンタウンの魅力の要素となった。しかし、居住者によっては、主張しすぎて景観に悪影響を与えることがある。また、住戸周辺の植栽に関しては、居住者に託されているので、手入れをしてくれない居住者に対して意識を高めることは簡単ではない。特に最近では、来訪者が増えるにつれて居住者の意識も向上し、自主的に家の周りの植栽をきれいにしつらえて、ほかの居住者もそれに習うなど、地区内がきれいになっていく傾向も見られるようになった。借家に住む居住者が自ら庭先の整備に励む姿はそうあるものではない。

## 8 | 新たなコミュニティの形成

2016年現在で、約150世帯。若夫婦が多く、10年前は一人もいなかった子どもは50人を超える。2015年の年末には、まち中の子どもたちが、居住者のダンサーからダンスと歌を教わり、クリスマスに仮設のステージで披露した(写真6)。

当初、街道沿いに数件しかなかった店も、今は50軒を越えるまでになった。店は、多くのカフェ、小物、そして多くの犬関係のショップ、撮影スタジオ(写真7)、録音スタジオ、写真館、歯医者、家具ショップなど。

月に1回のワンデーマーケットも定番化している。子どもたちも販売を手伝い、まちの人と交流し、そのたびに大勢の人々がまちにやってくる。

タウンでは、昼間でも男性同士の井戸端会議が路上で開かれる。居住者のバギーカーにまちの子どもたちが飛び乗り、運転手はレストランに招待する。タウン内のバーベキューにほかの居住者も参加する(写真8)。タウン内で引っ越すときにはタウン内の仲間が手伝う。タウン内で作曲、録音、デザインされたCDもできた。居住者がつくる花束がタウン内のお店で販売される。録音スタジオには、有名な音楽家が来る。撮影スタジオでは屋外でもモデルの撮影が行われる。まち全体を使った映画やドラマも撮影された。

そして音楽関係者、犬愛好家、デザイン関係、文筆家、子育て中の家族など、共通の価値観を持つ人同士のコミュニティがいくつもできた。

海外からの居住者、そして、バリアフリーのまちに高齢者や障害者も住もうようになり、当初意図した「安心安全タウン」が事実上、現実化したと言っていいかもしれない。

写真6|クリスマスに披露された子どもたちのダンス



写真7|約60年前に建てられた米軍ハウス。この棟は撮影スタジオに



写真8|タウン内のバーベキュー



## 9 | 円熟したまちへ

近年、近くに大規模なアウトレットモールができる。ジョンソンタウンはテレビや雑誌、タウン案内などに頻繁に出るようになり、2015年には都市景観大賞も受賞した。これを機会に、入間市も観光地としてジョンソンタウンと共同してイベントの企画やパンフレットを作成するようになってきた。そして、大勢の観光客が押し寄せるようになり、無料駐車場はいっぱいになってしまった。駐車場を探す車両と歩行者が行き交う。静かな環境はにぎやかになり、居住専用エリアに入る人もおり、新たな問題も発生している。これに対して、街路にはスピードを緩めさせるためのバンブ(起伏)をつくる、コイン駐車場を設け、外部の車両は一切タウンの中には入れないようにすることとし、新たなルールづくりも始まっている。

また、方々からジョンソンタウンにできた文化的で創造的な家族からなるコミュニティに感心が寄せられ、研究調査も始まりつつある。

まちにかかるさまざまな不断の努力はまだ続いている。

**わたなべ・おさむ**  
1959年北海道生まれ。1985年北海道大学修士課程修了、1986年ペンシルバニア大学修士課程修了、1991年東京大学博士課程(高橋鷹志研究室)終了。1992年渡辺治建築都市設計事務所設立。一級建築士、技術士(都市計画及び地方計画部門)。アメリカでは田園都市に住み、クラーレンスタインの住宅地を調査研究した経験がある